福島市公共施設の戦略的再編整備検討委員会　議事録

１　日　時　　平成３０年５月２９日（火）　１３：４３～１５：２８

２　場　所　　福島市役所４階庁議室

３　出席者　　佐藤 滋 委員長、奥本 英樹 副委員長、菅野 廣男 委員、後藤 忠久 委員、
齋藤 美佐 委員、霞 朝子 委員、原 馨 委員、三瓶 章 委員、門田 敦嗣 委員、
池澤 龍三 委員、紺野 喜代志 委員

４　内　容

（１） 開会

（２） 委員長及び副委員長選出

（３） 議事

① 委員会の役割について

② 公共施設の状況等について

③ 今後の進め方について

（４） その他

（５） 閉会

５　概　要　　議事内容について事務局説明後、質疑応答、意見交換

６　委員の主な発言

〇委　員　私の専門はファイナンスだが、特に震災以降は、福島県内に新たなビジネスを起こす必要があるということで、学生に起業家を目指させるプログラムを行っている。施設のハードを整えても、ソフトが伴わないと意味が無い。ソフトの担い手はどうなのか、ビジネスモデル的にどうなのかという視点で考える上で、４回の会議という限られた時間で方向性を示すために、大きなビジョンを捉える必要があるということを委員の皆さんと共有したい。例えばビジネスで言えば、何故そのビジネスをやらなければならないのかが一番大事である。それは世の中のプロブレムや負を埋めるというもの。今福島市には、公共施設を含めてどのような負があるのかを共有しなければならない。

まちのあり方というものが、高度成長時代の労働供給、労働再生産のためのまちではなく、福島市で生きるということが、どういう意味や価値を持っていて、そのためには公共施設がどうあるべきかという大きな視点が必要なのだと思う。今までのように余暇を利用して、図書館で過ごしてください、子どもと遊んでくださいというものではなくて、人生そのものの中で、この世代にはこういうものがあった方がいいとか、普段使いも含めてまちとしてこういった機能があった方がいいとか、昭和モデルとは違うモデルで考えるべき。福島市としてどう価値を高めていくか。ユーザーとニーズがあって、そのためのハードがあり、その担い手はどうなのかを考えていかなくてはならない。

これらの大きなミッションがあり、このまちはこう変わるであろうというビジョン、

そのためにどうやって成し遂げるかという戦略を考える必要がある。大きな課題ではあるが、皆さんの意見をぶつけていけば、いいものができる可能性があると感じる。ぜひこの会議を意味のあるものにしていきたい。

○委員長　中心市街地がどうあるべきかという話は、１９９８年に国の政策として出てきたが、民間施設や公共施設などを組み合わせて福島市の街中がどうあるべきかということ。福島市でどう暮らしていくのか、次回までに事務局で意見を整理してまとめるので、今日のところは皆さんの意見を出していただきたい。

○委　員　人口減少が進む中で地域の経済力は落ちてくると思うが、福島市の立地条件としては、奥羽本線の起点であり、東北新幹線の中間地点、東北中央道の開通などの条件が揃っている。交流人口の拡大により、人口減少をどれだけ補えるのか、どれだけの経済波及効果があるのか、データをとって検討することは重要だと考える。

　また、コンパクトシティや歩いて暮らせるまちづくりなどの考え方は、高齢者の交通の利便性という課題もあるが、人口が分散すると公共サービスのコストが上昇し、サービスの低下を招くこともあることから、人口密集を図ることにより、公共サービスのコストを抑えるとともに、質を高めるなど、中心市街地における公共施設のあり方は大きな意義があると感じる。そのような視点も含めて公共施設の再配置を考えていただきたい。今までは、公共施設は行政側がつくるものであったが、今後はどれだけ民間が関われるか、民間と行政が手を組んでどれだけ施設を発展させられるかがポイントではないかと思う。

○委員長　民間といっても様々で、世界的、全国的な企業であったり、市民そのものであったり、多層的なものである。市民がどう関わるかが大きな決め手になるし、重要であると思う。

○委　員　文化活動の立場から、数値化はされていないが、先進的な事例を見ると文化や交流の場から生み出される経済効果や地域経済に果たす役割は大きいと考える。公共施設の役割を市民サイドからうまく活用できれば大きな意味がある。人口減少も考慮し、多くの方々のご意見を集約すれば、公共施設の役割が花開くのではないか。施設稼働率についても、国内にも高い稼働率の施設は多くある。それらは地域の方々の意見を取り入れたかたちでできている。施設もすごくて、例えばホールの場合、大きいホールを可動式の壁で小さく出来たり、残響時間を変える設備があったり、考えようで色々な使い方ができると考えている。多くの方の意見が反映されるかたちで、公共施設の再編が検討されればよいと思う。

○委　員　公会堂、市民会館、図書館及び中央学習センターの老朽４施設については、それぞれの時代に、それぞれの場所を用いて必要とされ、老朽化し今日を迎えたと思っている。市民会館であれば、狭かった市役所旧庁舎を補完する第二庁舎のような役割も持っていたのではなかったかと思う。中心市街地の活性化に向けた大きな課題であるが、全国各地において、同じような状況の中で取り組みを行っているものの、成功した事例はなか

なか無いように感じる。福島市においても、駅前通りのリニューアル整備を行うなど取り組んでいるが、少子高齢化の中で難しい現実もある。

交通利便性も含め、中心市街地に施設を整備するのであれば、少子高齢化社会の中で、元気な人、健康な人が共に楽しめる、趣味を楽しめるような施設であるべきだと考える。図書館と保育所と市役所庁舎を合築したって良いと思う。他の事例を見ると色々な施設の合築がある。また、車社会における交通の問題も含めて考える必要もある。

公会堂は休館となったが、福島市には県文化センターがあるし、車社会の中では郡山市や伊達市の施設を利用することも多くある。そういった状況も考慮しながら、中心市街地の活性化について考えなければならないと思う。

○委員長　縦割りということについては従来から言われているが、違うものが一緒になることによって出てくるメリットがあると思う。自由な発想で考える必要があるのだと思う。

○委　員　この話は一見すると箱物のような話に見えるけれども、これは私たち市民にとって生活の改善の話だと捉えている。生活の改善と文化の向上という大きな柱のもとに、そこにある課題をどう捉えていくのか。改善や向上の手法として、箱物に対する今後の財政と利活用の問題など壮大な問題を預かったと感じている。市民の新たな価値観の創造や変化に合ったソフト面の変更も大事になってくると思う。感情も大事であるが、本日の説明にもあったように、この委員会が、確実なデータをもとに、それを受け止め、人口ビジョンを含め、数値で捉えながら進んでいくことを望みたい。管理者の視点、利用者の視点を併せ持った議論が期待できると感じている。

これまで震災以降、連携や協働を重視し、繋ぐことを一生懸命に取り組んできたが、この話は、繋ぐのはもちろんのこと、それ以上に色々なことを越えなければ方向を見失ってしまうのではないかと思うので、皆さんが色々なことを越えて議論されることを期待したい。

○委　員　公共施設の再配置自体が、持続可能な地域経営をどうしていくのかという観点で重要であると同時に、将来を見越したコンベンションのような新しい機能によって、どうやって地域の活性化に結び付けていくのかという観点もあり、地域の将来について考える貴重な場だと感じる。

個別に考えていくと、財政負担の話があったように、すべての施設を今の規模に建て替えることは難しい中、総量を規制する一方で、それだけではシュリンクしてしまう状況であるとすれば、コンベンションのような新しいチャレンジもしていかなければならない。サッカースタジアムもそうかもしれない。

必要な観点として付け加えるとすれば、民間との機能分担をどこまでできるのか。一つには施設的な機能分担もあるし、もう一つは運営的な機能分担もある。同じ公共施設を整備するにしても、民間が収益機会を得られる施設をつくることによって、公共施設が合理的に地域に貢献できる。あるいは、住民の利便性を高めることや、人々を呼び込んでくる効果を高めることができる。そういう観点から、どう民間が関わってくるのがよいかを考える必要がある。

もう一つは、組織を越えて広域的に考える必要があること。福島市に中核的な機能を持たせるということに加え、他のエリアの自治体や、県などのエリアが重複する自治体と機能分担をしていくという考え方もあると思う。他の自治体においても使命や期待される機能があるので、限界はあると思うが、こういったチャレンジをするのであれば、どのように民間や他の組織と連携・協力して目指す方向性をつくっていくのかが大事な観点としてあると思う。

○委　員　公共施設等総合管理計画にも携わっていたので少し話をさせていただくと、市長のお話にあったガラガラポンというのは、施設をガラガラポンという意味もあるし、これまでのベクトルや流れとは逆で、将来どうしたいかという視点からのベクトルで考え直すとう意味で、発想をガラガラポンしないとダメなのだろうと受け止めた。

私は今日福島駅を利用して会場まで来たが、地元の人だけではなくて、実際に福島駅で降りた人たちが、どうやったらもっとこのまちで過ごしてみたいと思うかという視点が大事だと思う。新宿に、バスタ新宿というバスターミナルがある。そこでは人が集まるような仕掛けがあり、すごく立派な箱物があるというわけではなく、機能で人を集約させている。例えば福島市でも、外から来た将来の世代が、これから集まって来るかもしれないという余地を残すような機能の集約を図っていくのが重要である。広域的な、人が動く拠点にしていくことが大事だし、駅前で民間の再開発が動くのであればこれを好機と捉えて、コミュニケーションをしっかりと図っていく必要がある。その時のツールとして、移動手段の確保というテーマでつくりあげていくという考え方もあるのではないか。

戦略的に優先順位を定めるということについて、つい私たちは将来の完成形を全部ここでつくりあげようとしてしまう。拠点の全部を整理するよりも、目玉となる機能をしっかりと定めて、そこからだんだん広がっていくような、私たちの世代で決めきるのではなく、次の世代にバトンを引き継げるような再編計画にしていかなければならない。次の新しい形をどんどんつくっていくから人が集まってくるし、興味も湧くと思う。私たちが全部片づけなくてはならないと思ってしまうが、それは無理だと思うので、この会議が次に繋ぐことができる要素をつくるきっかけになればよいと考える。

○委　員　委員の皆様の意見をお聞きしていると、駅前の中心市街地を活性化という言葉が強く耳に入るが、やはり文化の面も考えていただきたい。福島市には百以上の遺跡もあるとのこと、そういった視点も織り込んでいただき、今後ますます高齢化社会となるので、高齢者もそれらを意識し、街中が活気づいてくるような、時期世代に繋いでいけるような文化の面も考慮していただきたい。

○委　員　図書館の立場から、図書館というのは、文化を保存し、次の世代に届けていく、繋いでいくという大きな役割を持った施設であることを、胸を張って言いたいと思う。コンベンション施設を含め、色々な公共施設が必要だと思うし、話題になって当然と思うが、福島市のことを将来に繋いでいくためには、図書館のような施設をしっかりとつくっていくことも必要と思う。文化面、文化活動ということもあるが、楽しんで生きていくた

めのところと、今までのものをこれからに繋いでいくことも忘れずに再編の中に入れていただければと思う。

〇委員長　図書館もいろいろなところで新しい取り組みができていて、図書館を中心に交流センターのようなものができるなど、うまくいっている事例もある。ここでどこまで議論できるか、今ご提示いただいた皆様のご意見を含め、次回以降、全体として考え方をまとめていきたいと思う。副市長のご意見はどうか。

〇委　員　皆さんが感じているように、市としては、今までやったことのない壮大なプロジェクトだと思っている。コンベンション施設や老朽４施設について、今までも検討してきたが、それをどうするかのところで壁があった。そこに市長のガラガラポンの考えがあり、我々も発想を変える必要があると感じている。市役所にありがちな縦割りについても、これだけ各部が連携しており庁内連携のために政策調整部も新たに組織した。１２月までに青写真をつくるために、できるものすべてを導入してやっていく覚悟である。この会議の場だけでなく、必要な作業は進めていくので、気が付いたことは事務局に伝えていただきながら、よろしくお願いしたい。

〇委員長　財政的には厳しいが、４施設を複合することでメリットは出てくる。また、コンベンション施設についても、モデルはあるが、ある意味何でもありなので、新しいコンベンションを定義する可能性もあるのではないかと思う。委員の皆様が大事だと思う意見を自由に書いていただき、次回までに事務局へ提出をお願いする。